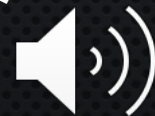


歯科開業医の談話室

- 01 上顎無歯顎印象採得
- 02 下顎無歯顎印象採得
- 03 日本人用無歯顎既製トレー
- 04 総義歯の難症例
- 05 クラスプと間接維持装置の配置
- 06 直接維持装置の設計
- 07 間接維持装置の設計
- 08 鉤歯の歯冠形態改造
- 09 大連結子の設計
- 10 根尖まで根管充填する方法
- 11 感染根管のプレパレーション
- 12 歯内療法用器具の操作方法
- 13 歯内療法器具の根管内破折防止
- 14 下顎孔伝達麻酔方法
- 15 歯科医師のための患者情報書類の書き方
- 16 半調節性咬合器の模型マウント方法
- 17 咬合理論**
- 18 顎関節症

- 19 咬合病
- 20 変形性顎関節症
- 21 外側翼突筋の障害
- 22 円板後部組織の障害
- 23 中心位
- 24 中心位の採得方法
- 25 不正咬合
- 26 咬合分析
- 27 咬合調整
- 28 咬合調整のための診察・診断
- 29 咬合調整の方法
- 30 咬合調整の症例
- 31 咬合平面
- 32 咬合高径の理論
- 33 スマイルデザイン
- 34 アンテリアガイダンス
- 35 ロングセントリック
- 36 ブラキシズム
- 37 顎関節の雑音
- 38 オクルーザルスプリント
- 39 理想咬合



この談話室の記事に関係する著書を紹介します。
いずれもシエン社およびアマゾンにて購入できます。

テラーメイドの
パーシャルデンチャー
— 最適化設計手順と鉤歯のプレパレーション —
外川 正

実践 や さ し い
咬 合 理 論
国際的咬合理論に基づく入門書
外川 正 著
藤村 朗 監修

患者情報書類の
書き方
らくらく
歯科医師のための
山本 隆行 監修
阿部 隆正 監修
中野 賢司 監修
金原出版

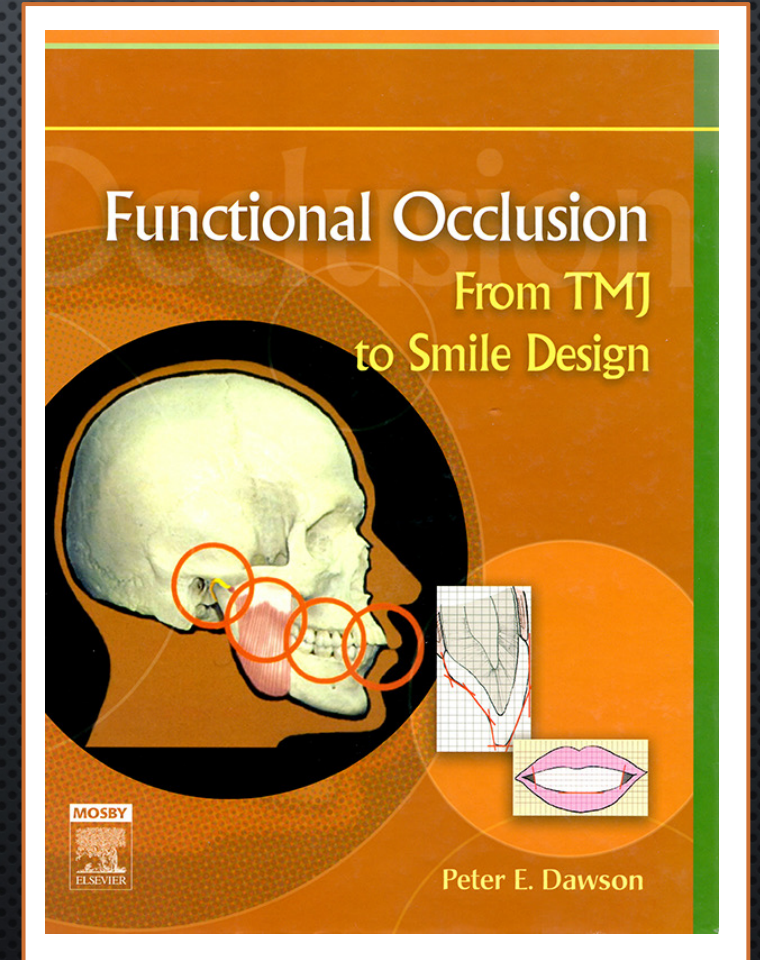
【歯科開業医の談話室 17】

もくじ

1. 咬合理論とは
2. 咬合理論の歴史
3. 日本における咬合理論の現状
4. 現在の咬合理論
5. 咬合理論の意義
 - 1) 補綴物装着の適正な咬合調整
 - 2) 不適切な咬合の発見と調整
 - 3) 咬合病の分析・診断・治療
 - 4) オーラルリハビリテーション
 - 5) 正常咬合の証明

まとめ

咬合理論

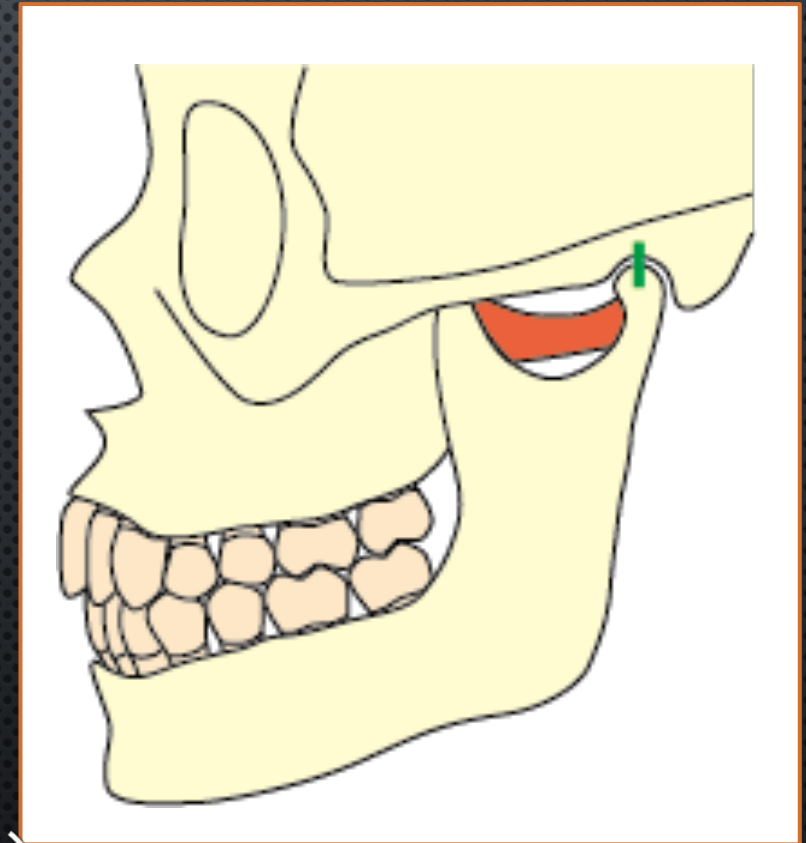


咬合理論

1. 咬合理論とは

咬合理論は、人間の咀嚼器官の構造や機能を把握し、人間の噛み合わせ機構を解き明かして理論として構築したものです。言うなれば、人間の噛み合わせの機能的解剖学です。

一方、不正な咬合面は様々な咀嚼器官に障害を及ぼします。咬合理論は、それら不正咬合により発症する疾患の治療方法を構築する上で重要な情報を提供します。咬合面と咀嚼器官との関係を理解した歯科医師は、咬合面の不正状態を診断し、その治療方法を構築することができます。



咬合理論

2. 咬合理論の歴史

咬合理論は、19世紀後半から、総義歯の人工歯に与える咬合に関する議論の中で誕生しました。19世紀後半、BonwillやSpeelにより、「ボンウィルの3角」「3点接触」「スピーの彎曲」が提唱されました。1890年ごろから歯科医学界は、「理想咬合」としてバランスド・オクルージョンを提唱するようになりました。1926年、McCollumは、Stallard、Stuartらをメンバーとしてカルフォルニア・ナソロジカル・ソサエティーを設立し、ナソロジーの本格的な下顎運動研究のスタートを切りました。その後、ミューチュアリー・プロテクテッド・オクルージョンは天然歯の理想咬合として、また、オルガニック・オクルージョンは補綴学的理想咬合として認識されております。さらに、グループ・ファンクション・オクルージョンが有歯顎の治療目標として提唱されました。

以上のように、咬合理論は歯科医療の基本的学問として今日まで発展してきております。私たち歯科医師は、多くの歯科医師や研究者により培われてきた現在の国際的標準咬合理論を学ぶ必要があります。





3. 日本における咬合理論の現状

冬の時代

- 「いろいろな説がある」
- 「考え方が偏っている」
- 「咬合だけでは解決しない」
- 「答えが出ていない」

ナソロジー (Gnathology)

- 「衰退」
- 「過去」
- 「遺物」

日本における咬合理論は、冬の時代を迎え、日本の歯科大学教育において、咬合理論は、ほとんど講義されていないのが実状です。書籍においても、咬合理論を収載したものは、ほとんど出版されておられません。

また、「いろいろな説がある」「考え方が偏っている」「咬合だけでは解決しない」「答えが出ていない」として、学ぶこと自体が避けられ、その結果、歯科医師の間で咬合理論に関して議論されることが少ない状況に陥っております。

咬合理論の進歩に多大な貢献を果たしたナソロジー (Gnathology) に至っては、「衰退」「過去」「遺物」として、咬合理論の歴史から消し去られる危機にあります。

咬合理論



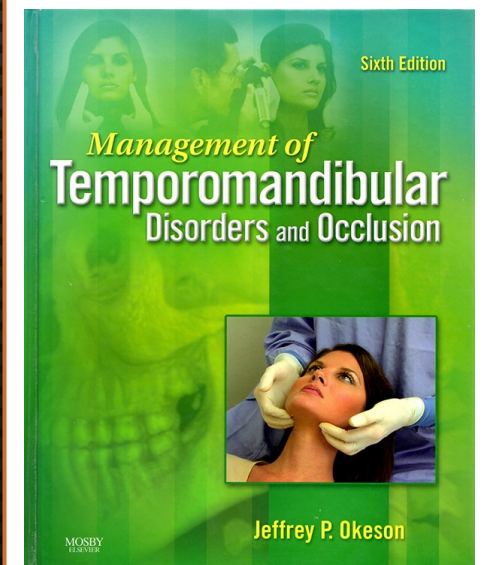
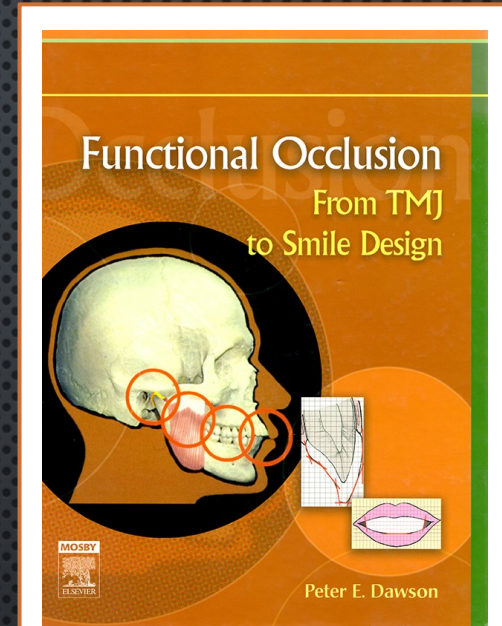
4. 現在の咬合理論

咬合理論は、百数十年前から、世界中の研究者の臨床経験、実験、研究、議論により培われてきました。

現在の咬合理論は、アメリカを中心としてめざましい進歩を遂げてきております。アメリカの大学教育においては、Okesonの専門書が教科書として採用され、多くの歯科医学生が咬合理論の教育を受けています。また、Functional Occlusionの著者であるDawsonと彼の仲間は、ドーソンアカデミーとして学会や講習会を主催し、咬合理論の発展と普及に重要な役割を果たしてきました。

現在の咬合理論は、DawsonのFunctional Occlusionに集約されております。

日本の歯科大学において咬合理論が講義されていないことは、日本の歯科医師が顎関節疾患の診断・治療を放棄することにつながり、問題があると言わざるを得ません。



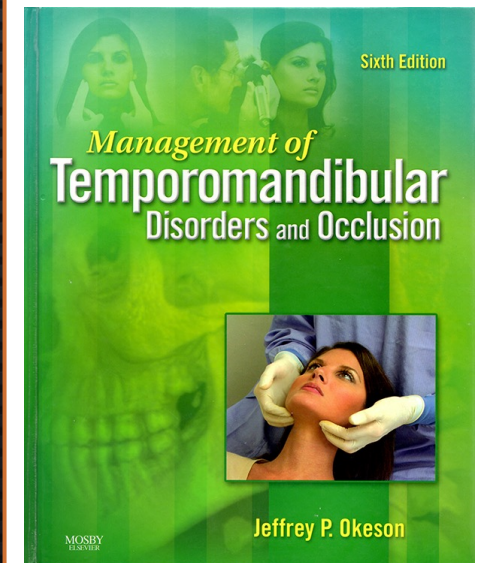
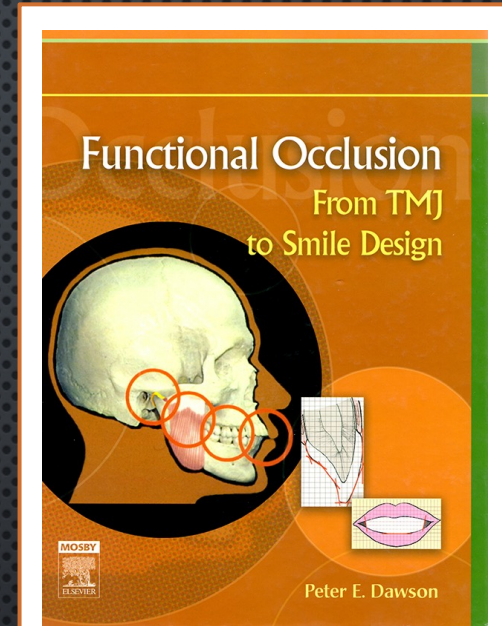
咬合理論

5. 咬合理論の意義

咬合理論は、すべての歯科治療に関係し、歯科医療にその応用が欠かせません。とくに、咬合理論は、不正咬合と顎関節の病気との関係を解明し、顎関節症の診断と治療には欠かせない学問です。咬合理論は、以下の歯科診療における指針となります。

- 1) 補綴物装着の適正な咬合調整
- 2) 不適切な咬合の発見と修正
- 3) 咬合病の分析・診断・治療
- 4) オーラルリハビリテーション
- 5) 正常咬合の証明(咬合病の否定診断)

それぞれについて解説します。

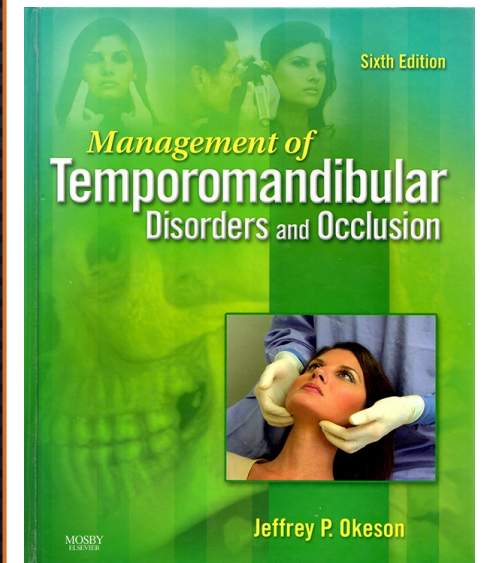
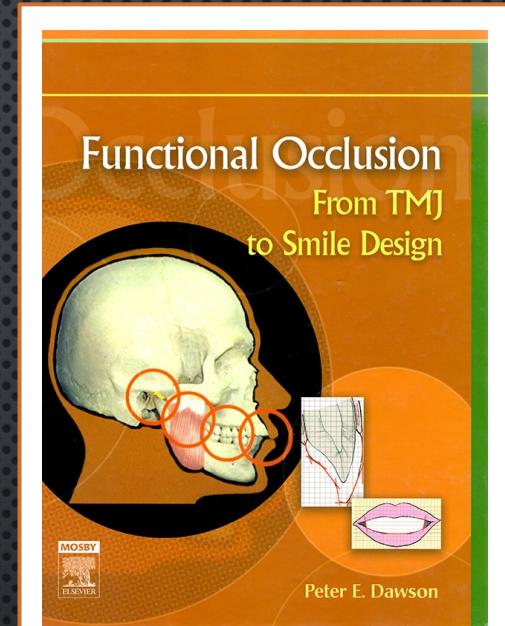


咬合理論

5. 咬合理論の意義

1) 補綴物装着の適正な咬合調整

補綴物装着に際して、咬合理論に基づいた咬合調整を行います。咬合理論に基づいた咬合調整を行うことにより、補綴物は患者さんの咀嚼器官に調和し、不適切な咬合により発症する咬合病・歯周疾患などが予防されます。



咬合理論

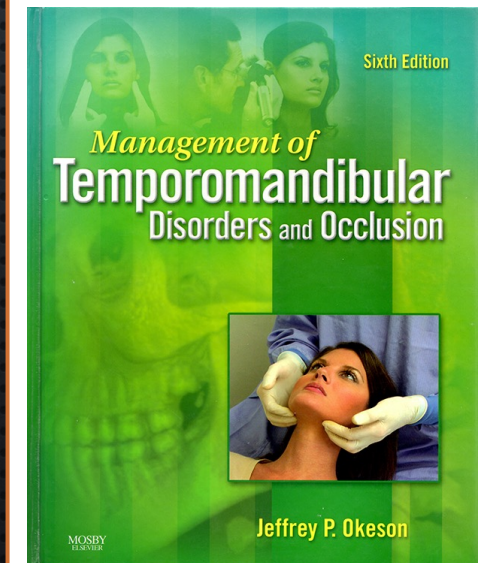
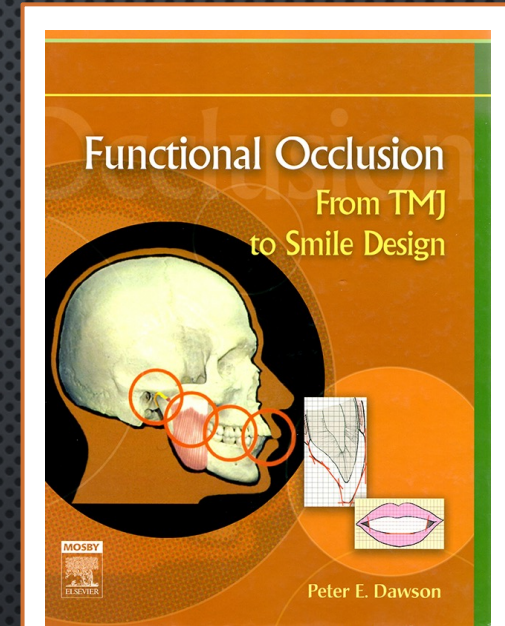
5. 咬合理論の意義

2) 不適切な咬合の発見と調整

以下の場合、咬合の不正状態を発見することが困難です。

- ・ 他歯科医院にて装着した補綴物の咬合が不適切な場合
- ・ 矯正歯科治療の中断あるいは失敗している場合
- ・ 長期間にわたり不正な咬合状態を放置した結果発症した障害の場合

これら不正状態の発見が困難な場合でも、咬合理論に基づいた診察・分析を行うことにより、咬合の不正状態を発見することができます。その結果、適切な咬合調整や咬合再構成を行うことが可能となり、不正状態を解消することができるのです。

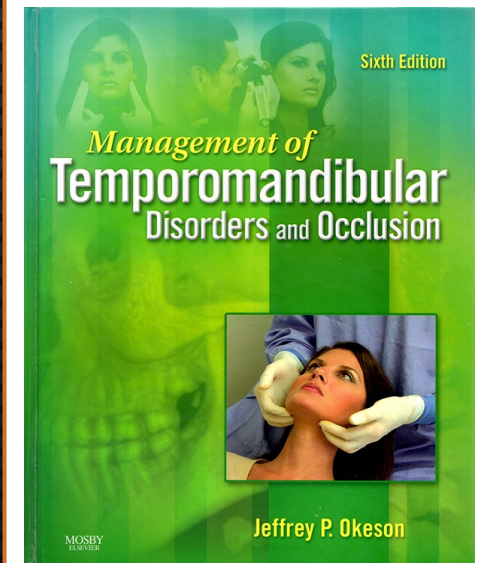
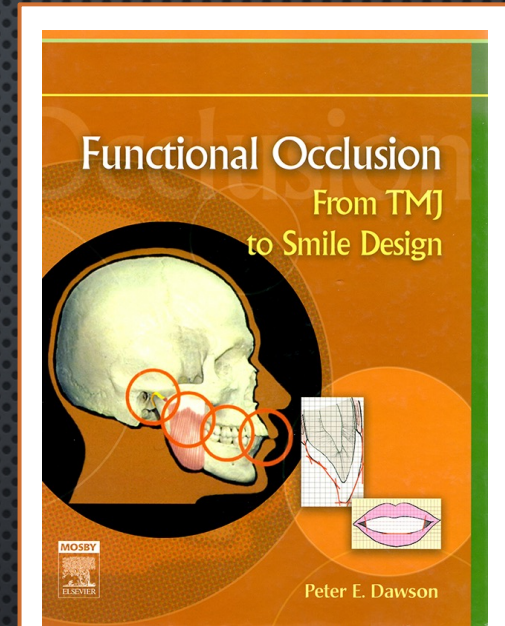


咬合理論

5. 咬合理論の意義

3) 咬合病の分析・診断・治療

咬合病は、機能的不正咬合に起因する疾患群です。咬合理論は、咬合病の分析・診断・治療において欠かすことができません。すなわち、歯科医師は、咬合理論を身につけることにより、咬合病の患者さんを診察し、その原因を明らかにし、治療計画を設定することができるようになるのです。

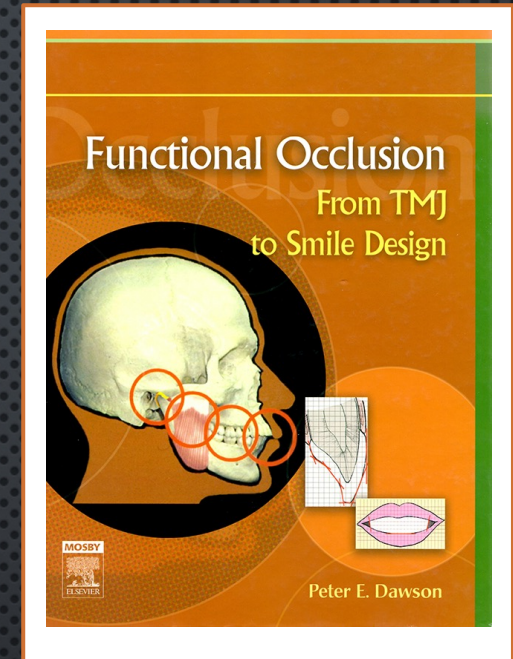


咬合理論

5. 咬合理論の意義

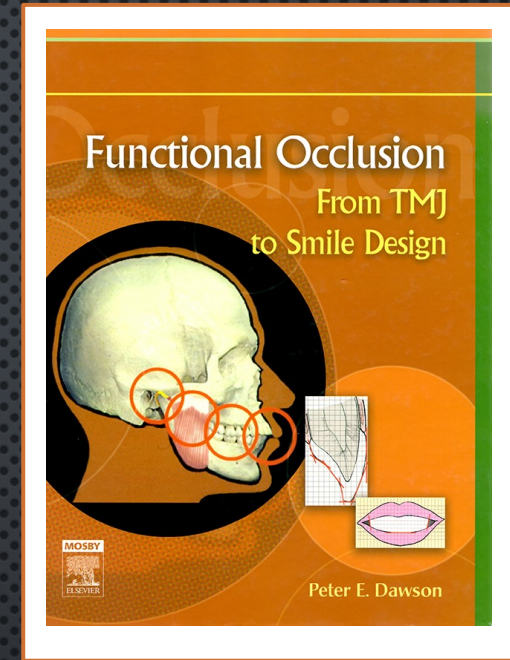
4) オーラルリハビリテーション

有歯顎者に新たな全顎咬合の再構成、いわゆるオーラルリハビリテーションの必要に迫られた場合、その治療結果は、歯科医師が咬合理論をもち合わせているかどうかにより、大きく異なります。その治療目標としては、理想的な咬合を設定するという考え方もあります。しかし、今日受け入れられつつある治療目標は、患者さん一人一人に応じた不正のない咬合です。そのため、オーラルリハビリテーションに際しては、高度な咬合理論が欠かせません。



咬合理論

5. 咬合理論の意義 5) 正常咬合の証明



他診療科の医師から「その症状の原因は、噛み合わせにあるかもしれないので、歯科医師に診てもらいなさい」と告げられた患者さんが、来院することがあります。この場合は、患者さんの不正な咬合の有無をチェックし、症状の改善を図ることになります。しかし、患者さんに不正な咬合が存在せず、原因が他診療科の疾患にあると思われる場合には、歯科医師は「噛み合わせに異常が無い」とする返信書を発行することになります。その返信書には、咬合分析とその結果を示し、噛み合わせに異常が無いことを証明し、医師に理解可能な根拠を示す必要があります。

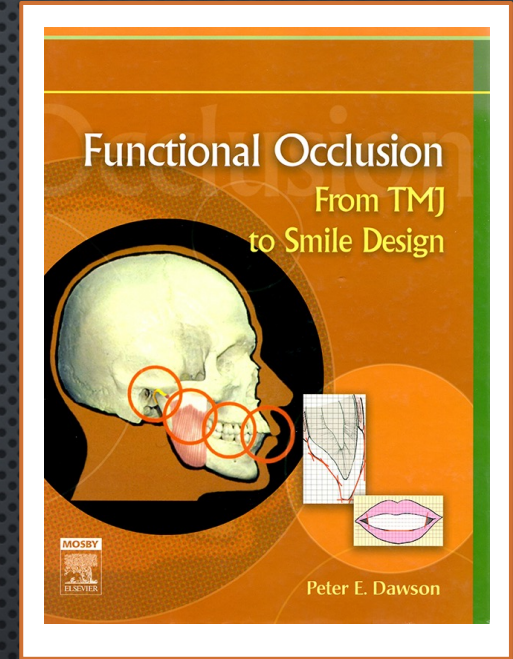
これらの診察と診断書と返信書は、咬合理論を修得することにより発行することができます。

咬合理論

まとめ

歯科医師は、咬合理論を学ぶことにより、患者さんの咬合状態を分析することができるようになります。その結果、咬合理論を修得した歯科医師は、患者さんの不正咬合状態を発見し、その不正状態を解消する治療計画を設定することができるようになります。

咬合理論はすべての歯科医療に応用され、その応用は歯科医療の質を向上させることにつながります。さらに、咬合理論は、不正な咬合から引き起こされる疾患に苦しむ患者さんを救う上で重要な役割を果たします。



【歯科開業医の談話室 17】

咬合理論

参考文献

- 1)保母須弥也:咬合学事典、書林、東京、1979.
- 2)Peter E. Dawson : Functional Occlusion From TMJ to Smile Design, MOSBY, St. Louis, 2007.
- 3)外川正:入門顎関節症治療のための咬合分析と診断, 金原出版, 東京, 2009.
- 4)外川正, 武田泰典, 加藤貞文, 阿部 隆, 千葉健一, 水間謙三, 岡田 弘:いわゆる「顎関節症」から分離して扱うべき疾患—とくに隣接医科との整合性を考慮して—, 日本歯科評論, 624:171~180, 1994.
- 5)Niles F. Guichet : Occlusion, Anaheim, Calif. , 1977.
- 6)最新医学大辞典, 医歯薬出版, 東京, 1987.
- 7)福井次矢:内科診断学第2版、医学書院、東京、2008.
- 8)Okeson JP : Long-term treatment of disk-interference disorders of the TMJ with anterior repositioning occlusal splints. J Prosthet Dent 1988 ; 60 : 611-616.
- 9)Dawson PE : Bad advice from flawed research. AGD Impact April : 30-31, 1995.



今回のテーマを気に入っていただければ👍をクリックしてください。
質問あるいは疑問がある方は、下の公開コメント欄にお書き下さい。
よろしければチャンネル登録をお願いいたします。

次回の項目は、歯科開業医の談話室18番目「顎関節症」です。

その他の著書

